

經濟叢論 每月一冊發行
 第四十七卷第六號 昭和十三年十二月一日發行
 大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

東京帝國大學經濟學會

經濟叢論

第 六 號 第 四 十 七 卷

昭和十三年十二月一日發行

論 叢

幕末の出貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

投資節約の均等について……………文學博士 高田保馬

商品リンク制の發展……………經濟學博士 谷口吉彦

時 論

日本銀行の國債引受と財政經濟……………深井英五

戰爭の意義と共同體的國內革新の急務……………經濟學博士 石川興二

研 究

獨逸の植民問題……………法學士 前田稔靖

中小工業としての下請制工業……………經濟學士 田杉競

說 苑

鮑 脣 錄……………法學博士 財部靜治

農業經營に於ける日支の異同……………經濟學士 菊田太郎

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

本誌第四十七卷總目錄

(禁 轉 載)

說苑

鉤 屑 錄 (一)

財 部 靜 治

一、齊 民 要 術

Lee, Mabel Ping-hua の支那經濟史には本書名を譯して Essentials for the Equalizing of the People とせり、資本家本位の經濟、少數大富豪の現存を前提とせる文字通り本邦流解釋による齊民は、中心を分配問題におくこととなるべしと雖も、本書の志す所は茲に存せず、蓋し字源に齊民は平民、民は齊等にして貴賤なきが故とあり、之が一出典として史記平準書に齊民無藏蓋とせるを引けるによりても推すべきが如く、民をして殖産に勵ましめ又之をして一齊に天地の惠澤に均霑せしめ、依りて和衷諧穆の美風を擧げんとするにあ

ればなり、平等思想を根蒂に宿すとは謂ひ得べきも、之を達成する方法として説く所は、Baohat が自由放任により經濟調和を期成せんとし、社會主義者が階級の懸隔打破を賑民の要道たらしめんとせるとは大にその選を異にす。従ひて同書中主として取扱ふ所も穀類、蔬菜、果樹、家畜、家禽、養魚を耕植飼養並に食養の兩面より考察し、兼ねて楮、漆、藍等食用以外の有用植物にもその敘説を及ぼし、併せて又一般に農産製造の羅説を期したり、素より輓近科學特に土壤學、有機無機農化學の知識に立脚して解説せんとするものに非ず、實地農業に即し經驗の智慧を本として本書を成せり、敘述簡明なるも克く肯綮を穿つ、今日の農業經濟論よりせば、汲むべきもの多しとするを得ざるべきも、農技を説ける點よりせば學ぶべきもの多し、後(北)魏の古へに際し(三八六―五三四年)賈思勰の著はせる所なりと雖も、後世農書の白眉として推稱せらるゝは故なきに非ず、即ち四庫全書簡明目録中には謂へり凡九十二篇、於農圃衣食之法、織悉備至、又文章古雅

援據博奧、農家諸書無更能出其上者、其註不題撰人、以文獻通考所載李燾序證之、知爲孫氏所作、其名則不可考矣と、前出 Lee がその著書中（一四九頁脚註）説く所によるに、本書中掲ぐる多くの仕組中幾何か當時の人により使用されたりとの意により漢代に屬するか周知の人名が擧げらるゝ少數事例を除けば之を確かむるに由なし、されど北魏が時代の點より漢を去ること遠からざるを以て、漢代農業の知識が大に發達せることは推定せらるるとし、彼自身は漢代經濟事情解釋の關係上興味ありとせる所を、第一耕田篇中に引ける漢代勝之の書、第三種穀篇、卷二諸篇中よりの抄録を米譯として掲げたり。措辭間々輕妙を極むると共に要領を得たるものあるを示すの一端として第五十一種竹篇に説く所を引かんか、曰く

中國所生、不過淡苦二種、宜高平之地、近山阜尤是所宜、
下田得水、則死、黃白軟土爲良、正月二月中、斲取西南、引根並莖葉去葉、於園內東北角種之、令坑深二赤許覆土厚五寸、竹性愛向西南引、故於園之東北角種之、

數地、爲滋蔓而來生也、其居東北角者、老竹種不能生、生亦不能滋茂、故須取其西南、引少根也、稻麥糠糞之、二種各自堪糞、不令和雜、不用水澆、澆則淹死、勿令六畜入園、二月食淡竹筍、四月五月食苦竹筍、蒸煮忽酢、任人所好、其欲作其器者、經年乃堪殺、未經年者、軟未成也

と、之を承けて筍の敘説を附し、又竹の名目奇異、中國物産に非る者を最終篇中に列擧したり、全篇實用を眼目とせるの旨意は、著者がその序中告白する所により明かなり、捨本逐末、賢哲所非、口富歲貧、飢寒之漸、故商賈之事、闕而不錄、花草之流、可以悅目、徒有春花而無秋實、匹諸浮僞、蓋不足存鄙意、曉示家道未敢聞之有識、故丁寧周至、言提其耳、每事指斥、不尙浮辭とせるは是なり、春花秋月も亦國民娛樂の一面たり、文化生活は糊口の薄資及弊衣に盡くるものに非ず、天然の古淡に親しむも亦文化國民の正當欲求視し得べきを想ふ者としては、一々その主張に首肯し難しと雖も、編著の熱烈なる趣旨を堅持するの結果右の主

張を看しものとせば、寧ろ、驚嘆を叫びて可なりと考ふ。

二、魚扁の漢字體國字

重野安緯、三島毅、服部宇之吉監修漢和大典には別篇として漢字體國字を列舉附載したり、その數都べて九七、想ふに全部を網羅し得たりとはせざるべきも(二例によるに字源には鱧なまこを載するに本書に之を擧げず)就中魚扁に屬するもの二九あり、夫れ魚名及之に當つる文字は國內にありても地方により相違するもの多し、されば採擧されたる文字中異字同魚なるもの、例令ば鱧なまこ魚の成長したるものを鮭おぼろとし、練鱧なまこは鱧なまこに同じとするの例同字典にも示さると雖も、同字により異物を併示せんとするもあり、マテとコチとに同字鱧を當てんとせらるゝは之なり。何れにしてもかく魚扁によれる國字を比較的多く生めるは、茲にも亦我國國民給養上漁獲物に待つこと多き一端を窺はしむと言ふべし。

凡そ同代の異名並に古今名を異にするものゝ比較

は、古來我邦物名の幾多研究者が種々の實用に鑑み、心血を注げる所なり、特に此趣旨を同文の關係ありとせらるゝ國際間に及ぼして檢討する際興味多しとすべく、恰も魚品に就きその例を看ること尠からざるにより深く之を想ふ、特に同名異物の例として我國の白魚はくぎょは支那の銀魚いんぎょに當り、滿洲國にて所謂白魚はくぎょ(一二尺、めだかに似たり)は別魚たるが如きも存すと雖も、同物異名の例には更に深く注意すべきあり、此點に就き伊勢貞丈が本邦古來の日常生活と深き關係ある二魚に就き指摘せる所、寧ろ痛快を覺えしむるを以て之を引かんか、曰く

問云、或儒者衆の説にタラに鱈カツラに鯉を用ゆ、是倭俗の作た字なり、タラは吳魚又カツラには松魚の字を用へし、此字は朝鮮國の東醫寶鑑に見えたりと被申候、此字正字にて候哉。答曰「タラもカツラも唐に無之候故唐の文字無之候、日本に有之故鱈鯉の字を作りて用ひ候」「朝鮮にも此魚有之故吳魚松魚の字を作り用ゆ、日本にて鱈の字を作り候は魚肉

の色白き故雪の字を傍に書候、カツヲは古來生なまにて食事無之(つれづれ草に見ゆ)ほしてカツヲをフンにして天子の供御にも上り候、ほして堅き故上古書に堅魚と記し候を、後に二字一つにして鯉の字となし候(鯉の字源順が倭名抄に出でたり、又字書に鯉の字あり、別の魚なり、此方鯉字同出來也)彼の儒者朝鮮にて用る字を貴びて我國に用る字を賤め用さる、江戸日本橋に住たる儒者品川に宿替して中華に壹里近くなりたる云て悦びしと同じ類にて候と、かく儒者は唐土をありがたかる故、唐土に近き朝鮮までを貴ぶ心底、おかしき事にて候(日本文庫第四編收錄幼學問答二頁參照)

と、因云、辭源には鯉の一義として爾雅を引き「鯉大鯛」とし即鯉魚也とせり、然るに字源には「鯛」の目を舉げず、鯉の目中鯉節に「細鯉魚」を當てたり。

我蜻蜒洲は國土大ならずと雖も、南北に蜿蜒長く及ぶがために、陸産の種類にも富み洽なく國民の給養授職に恵むこと多し、されど國內又四周の水産物無盡藏

に比すれば、素より同日の談に非ず、内水舟筏の便を通すべきもの多からずと雖も、その魚屬及その製品侮るべからざるものあり、領海北鱗南介の品彙匹儔に至りては枚舉に遑なく、又大體に多産なり、燻製の豚を英語に仿ひてハムと言ひ、ハムの製法によれる北魚鱒、鮭を燻製と言ふ、要は國産の富を國際關係に迄延ばさんとすと觀すべきなり、若し夫れ宏大なる自由の海洋に至りては、我勇邁なる海員漁民の活舞臺たり。偶々右指摘せる、一些事によりても亦水界經濟の開發存養忽がせにし難きを想はすんば非ず。

三、地圖表章の手加減

統計圖表特に地圖表は統計大量全局の事態を簡明に大觀せしむるのみならず、地方別の相違を一瞥の下に會得せしむる點をその特色とす、されど人品事物の大少寡別による等級附けの分つこと、繁多に過ぐれば現象を圖面に寫すこと錯雜に流れて早見の便を失はしめ、その反對に稀少に過ぐれば等級附けにより相違を

示さんとするの眞目的は達せらるゝこと不充分なり。

試みに本年二月發行の昭和十一年度(會計)簡易保險局統計年報に就きて看るに、就中圖表の一として件數に

よる成人保險(成人とは小兒保險に對して言へり、從ひて滿

一二歳以上の契約者を含む)府縣別死亡率一覽圖(南洋關東

州及滿鐵附屬地、樺太、臺灣を併章、死亡率は一般的には年度

始及年度末に於ける現存契約高に年度内死亡數を加へたるも

の、二分の一を以て年度中の死亡數を除して計算す)を挿み

たるがこれは虞らくは等級別を附すること粗大の嫌ひ

あるの一例とするを得ん、即ち死亡率の等級を分ちて

〇・〇〇八一〇・〇一一九九、〇・〇一二一〇・〇一四九九、

〇・〇一五以上の三段としたり、之を別掲數字表に徴す

るに最高臺灣の〇・〇二〇三四より最低南洋の〇・〇〇八

五八の間に於て平均〇・一三〇七を示せり、等級別粗大

とも認め得べき徵證として圖面上中段の符牒により表

はさるゝもの府縣の過半数に及ぶ、又最高最低間の差

數より推して考ふるも、今少しく細かに刻むを可とせ

ざりしやと想はる。(試みに昭和五年國勢調査最終報告書

に挿める自大正九年至昭和五年人口の増加割合府縣別地圖表が五等級別として示さるゝの一例に比較して之を想へ)足袋の製作上その文を刻むに當り九文及十文の間を、二分するや四分するやにより實用の便不便に大差を生ずべきは、統計家も亦心すべき所なり。

四、Westergaard 教授の追憶

昨年 Harald Westergaard 教授(一八五三—一九三七年)八五の高齡を以て卒去せるにより、歐洲はその一故老統計學者を喪ひたり、吾人は親しくその警咳に接して教を受けしことなかりしも、統計學に關する氏の諸述作は久しく敬重せる所なるを以て、今昨年中倫敦の統計協會雜誌に掲げられし略傳を骨子とし、多少の増補を加へて之を紹介し、聊か追悼の意を表せんと欲す。

同人の令名を祖國丁抹以外に擧らしむるに至りし著書死亡率及罹病率論 Die Lehre von der Mortalität und Morbidität は一八八一年に公けにせられたり(一九〇二年に改訂)同著が如何なる諸因縁の下の草せられしかは、そ

の著 (Contribution to the History of Statistics, 1932 中生
死統計論の一章を讀むことにより之を窺ふに足れり、
同書は現代の諸統計學者が統計學の學修を始めし當時
既にその題目に關する標準書たりき、同書述作以前著
者は丁抹の保險處に奉職せるが、本書を大成するの土
臺となりし論文は Copenhagen 大學の金牌を賞與せら
れ、次いで一八八三年には講師、一八八五年には三三歳
にして教授に任命せられたり、その講座を占むること
四一ヶ年、その任期は早過ぎたる辭任により中斷せら
れやがて又復職するやその前任期を記念せる自己の大
理石胸像の前にて講義するの、逸偉經驗を重ねたり、智
能的勇氣滿身に溢れたる第八十回誕辰に際し、氏のた
めに頌壽せる丁抹統計學者の論文集により記念せられ
たり、翌年國際統計協會第二二回會議に臨むため倫敦
にその姿を現はすや一大喝采を以て迎へられたり。

Westergaard は多作の學者たらざりき、以上擧げた
るに述作以外には Grundzüge der Theorie der Statis-
tik, 1890 あり、一九二八年講師 H. C. Nyballe との

共編により改訂せられたり、又 The Economic Dev-
elopment of Denmark, 1922 (Carnegie Endowment) あり、
氏の興味を注げる中樞は生死統計にあり、是に關
する二回講演は一九二五年倫敦大學にても開かれ、同
年の Biometica 及 Economica に發表せらる、その
外に丁抹の定期刊行物に載せし諸論文ありと雖も、そ
の生涯を通じ専心せる所は社會事情の研究及改良にあ
り、失業、貯蓄、計畫經濟その他の諸題目に就き論辯
したり。

その専修範圍以外に於ては統計學の理論に寄與せる
所創見を以て出色とせることなし、寧ろ新發展の要度
に就き批判的評價を加ふる點に於て然りき、算術の手
續が要部を占むるに當りて高等數理を利用することに
不同意を唱へ、算術は氏の有力なる文具となれり、そ
の見地は之をその論文 The Scope and Method of
Statistics, 1916 (米國統計協會雜誌所載) に就き窺ふに
如くはなきも、同趣旨の主張は既にその統計學理綱要
序言中にも吐露せらる、即ち曰く

統計學理の述作上人は間々特殊の研究例令は死亡律
 度研究上應用せられ、本書中第二篇(統計學各論)中に
 摘要せらるゝ方法の解説に局限せられ、その以外に
 は統計現象の常例と吾人の人間意志自由觀に對する
 右常例の意義とに就き、普通考察を及ぼすことに甘
 んじ、此常例即ち大數の法則が如何なる條件の下如
 何なる制限を伴ひて現はるゝかは之を問はず、かく
 處理する時は數理的研究に深入りするの要なしとす
 べき利あり、その代りその統計學者は研究の確實な
 る各根據を奪はるゝに至る、蓋し大數の法則が中軸
 を制すべきや否やを辨識せずとせば、觀察に本づ
 き論結を確立し得べきや、斷じて決し得ざるべき
 を以てなり、従ひて予は此缺陷を避くるため第一篇
 (統計學通論) 中、一面には蓋然計算の諸主要定理を
 解説し、他面是等諸定理が統計觀察と符合すべきや
 を究めたり、こは間々忽がせにせらるゝ所。

と、敍説の順序は自から前記論文と異なるものあり、又
 右論文中には學理綱要後に於ける統計學發達に鑑み、

増補せられたる言説尠からざるも、その主張の同趣旨
 たるは前にも一言せるが如し、綱要第二版序次の順序
 も亦初版と同じからず、數理應用方面の説明は大に敷
 衍せられたり、蓋し一般統計學風の變遷を酌量せるも
 のなるべし、方法の研究者は又何人たるを問はず、前
 記統計學史への寄與を無視するを許さず、氏は一九〇
 七年倫敦統計學會の名譽會員に擧げられ、一八九三年
 來皇國經濟學會の會員たり、多年之が丁抹通信員とも
 なれり、一九〇二年には國際統計協會の會員に選ばれ、
 一九二九年にはその名譽會員となれり、されど一九〇
 七年の Copenhagen 會議以外に於ては、同會の事業に
 重立ちたる役目を果すことなかりき。

質朴、有爲又友情に秀でたるその人格の美點は、そ
 の智能上の卓越と相待ちて、統計學者及經濟學者仲間
 に於ける隨一の地位を占めしむるに與りて力ありき。

(尙前記論文統計學の範圍及方法に前置せる Willcox の本著
 者紹介參照)